

歯吹如来造像の疑問点について*

長谷川 正 康**

阿弥陀如来はその造像の様相において、何種類かに分類されるという。

本題の“歯吹如来”像は通常仏像にはみられない歯相がとくに認められるところから、歯吹如来、歯吹仏、歯吹尊、歯仏などと呼ばれているものである。

中山太郎氏はライオン歯磨編「よはひ草」第五輯「歯牙と民俗」と題する歯の民族学的考察の中で「伊勢国桑名町萱町の法盛寺（真宗西派）の本尊阿弥陀仏は、湛慶の作で、奥州の藤原秀衡の念持仏であったというが、御歯まで具足してゐるので、俗に^{はふき}歯吹如来と称している（勢陽五鈴遺響）。歯吹如来とか歯出し地藏とかいう仏像は、この外にも各地に存しているが、既に…略…これも結局は歯の患者から報賽を獲んがために製作したものに過ぎぬのである。我国に歯に効験のある神や仏の夥しきまでに存してゐるのも決して偶然ではなかったのである」と述べておられ、これ、すなわち、この歯相を具現する如来が、人寄せのために作られたものであると論じられている。

しかし、私はこの説明に多少の疑問をもっており、種々文献などを探していた折に、早稲田大学で、仏教美術を専門とされている加藤諄教授にお会いし、「歯吹如来像の表現とその意義」というご研究の成果を収めた文献を戴き、その後も引続き御指導を賜り、ここに歯科の立場から歯吹如来造像の疑問をある程度解き得たので、加藤教授の論文を中心に以下解釈を加えたいと思う。

現在、加藤教授の調査によると全国で19体（表1）で、このうち11体は加藤教授による新発見の

ものである。そして、従来、専門の仏教彫刻史においても、歯吹如来像についてほとんどとりあげられていないという。

歯吹如来の由来は加藤教授によれば、近世以前には遡り得ないといわれる。

新編武蔵風土記稿、八王子の極楽寺像について「俗に歯吹尊」といい「其像異相にして唇開き歯白く見ゆるゆへ、歯吹尊とよべり」とあり、また、勢陽五鈴遺響の桑名法盛寺については、「御歯具足スル故＝歯吹如来ト俗称ス」とあり、さらに、京都正法寺（都名所図会）に「阿称陀堂本尊は歯仏と称す。この阿弥陀仏は笑ひ給う相好にして、御口よりむかふ歯見ゆる故、世に歯仏の如来と号す」とあり、江戸時代には阿弥陀仏像に歯が見えていることが注目され、歯吹如来あるいは歯仏とよばれていたことがわかる。

この歯吹如来の信仰については、比較的多くの文献が、江戸、大阪あるいは各地で居開帳、出開帳が行なわれていたことを伝えているところから、今では忘れ去られた歯吹如来像も盛んに信仰されていたことがうかがえる。

ただし、その信仰が、はたして、歯を病める人人によってのみなされていたかどうかは不明であるが、中山太郎氏のいわれるように歯が見える仏像のため、何か歯に関係ある仏であると思ひこみ、歯で病む多くの人々が信仰に走ったであろうし、また、これを幸に住職がたが逆に、いかにも歯に関係ある歯の仏であるがごとき宣伝をしていたかもしれない。

しかし、歯吹如来像は、そのようなことのために造像されたものではない。

歯吹如来像の造像の特徴（加藤教授による）を挙げてみると次ぎの通りである。

* The reason why Hafuki-Nyorai was made.

** Masayasu HASEGAWA 東京歯科大学教授
東京歯科大学稲毛歯科診療所長

表 1 齒吹如来像一覧（加藤諄教授による）

寺 名	像 容	像 高 (単位: 寸)	歯相	足柄	仏足文	時代	所 在 地	備 考
1. 万福寺	来迎印立像	95.5	アリ	ナシ	アリ	鎌倉	茨城県行方郡玉造町羽生	猪川・光森氏既報。観音勢至両脇侍像とも足柄なく仏足文あり。
2. 称念寺	——	——	アリ	ナシ	アリ	——	千葉県長生郡長南町千田	今所在不明。
3. 誓願寺	来迎印立像	97.	アリ	ナシ	ナシ	室町	東京都府中市紅葉丘	旧所在地，台東区西浅草 2 丁目。
4. 極楽寺	来迎印立像	99.	アリ	ナシ	アリ	室町	東京都八王子市大横町	光森氏既報。
5. 長林寺	来迎印立像	64.5	アリ	ナシ	ナシ	江戸	横浜市戸塚区戸塚町	光森氏既報。
6. 本誓寺	来迎印立像	78.	アリ	ナシ	アリ	室町	神奈川県小田原市入谷津	本誓寺本尊。
7. 本誓寺	来迎印立像	81.5	ナシ	ナシ	アリ	室町	上に同じ	本誓寺傍仏。
8. 浄禅寺	来迎印立像	81.8	アリ	ナシ	ナシ	鎌倉	富山市梅沢 2 丁目	光森・石田氏既報。両足部分後補。
9. 大恩寺	来迎印立像	79.5	アリ	ナシ	アリ	室町	愛知県宝飯郡御津町広石	
10. 栄国寺	来迎印半跏像	59.5 (坐高)	アリ	——	アリ	江戸	名古屋市中区東橋町	
11. 法盛寺	来迎印立像	78.	アリ	ナシ	アリ	室町	三重県桑名市萱町	
12. 竜泉寺	来迎印立像	36.	アリ	アリ	ナシ	江戸	三重県四日市市富田一色	光森・石田氏既報。
13. 専修寺	来迎印立像	80.	ナシ	ナシ	アリ	室町	三重県津市一身田町	平松氏撮影の写真による。
14. 本覚寺	来迎印立像	99.5	アリ	ナシ	アリ	鎌倉	京都市下京区富小路五条下ル本塩竈町	
15. 乗願寺	宝冠説法印立像	105.	アリ	アリ	ナシ	室町	京都市下京区寺町通仏光寺下ル	光森氏既報。一時江戸春林寺にあり。
16. 正法寺	——	——	アリ	——	——	——	京都市東山区清閑寺霊山町	今亡。
17. 光明寺	来迎印立像		アリ	アリ	ナシ	室町	大阪市天王寺区上本町 5 丁目	光森・石田氏既報。
18. 常楽寺	定印坐像	65.5 (坐高)	アリ	——	ナシ	江戸	大阪府寝屋川市仁和寺	光森氏既報。
19. 願行寺	来迎印立像	77.5	アリ	アリ	ナシ	江戸	徳島県海部郡穴喰町穴喰浦	享保年間長福寺を現寺号に改む。

1) 歯相の表現（把富喜）

小田原本尊齒吹如来像は来迎印をとつている。顔をみると（図 1）口唇が僅かに開いており，その唇の間に白い歯が見える。このように，僅かとはいへ口唇の間に歯をみせているのは顔に動き表情がうかがえることである。

極楽寺本尊縁起に「御口すこし開き給いて，金口説法の相に似たり，微笑悦予の御像というべきや」とある通り，いかにも説法微笑の印象を人に

あたえる。

2) 足下に仏足文，千輻輪相の表現

齒吹如来像には，歯相の表現があるばかりではなく足裏に仏足文（図 2）が施されているのが特徴である。

千葉県上総一の宮称念寺（天明六年）竜宮出現齒吹如来略縁起の中に「此如来御足の裏に千輻輪相ましまして，余にたぐい希なる尊像なり」とある。



図 1 本誓寺齒吹如来（加藤による）



図 2 本誓寺本尊足裏仏足文（加藤による）



図 3 本覚寺本尊足裏仏足文（加藤による）

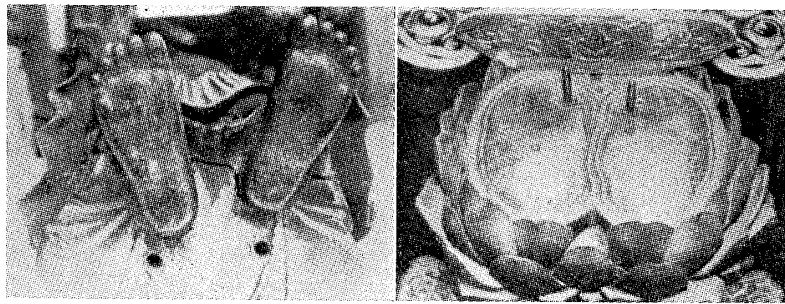


図 4 本誓寺本尊裾底、本誓寺本尊蓮台（加藤による）

また、愛知県津山（愛知県宝飯郡御津町広石）の大恩寺本尊縁起に「無量寿如来酬因四八の妙相残るところなく、…略…特に齒齊逾雪の妙相をあらわし、足下平満の御相好そのままに、別にあやつりなふして蓮台にたたせたまう如法の尊容は、^{あたかも}尤 世に希奇とするところなり。これによって世に把^は富喜^{ふき}の如来と称し、又は憂喜安志^{うきあし}の尊像と申し奉りぬ」とある。

加藤教授は、この二つの特徴からも齒吹如来は齒相とともに足裏には仏足文をも合せて表現されることが造像の要点であるといわれている。

本来、仏足文図様の中心文である千輻輪相（図 3）は仏の転法輪を象徴するもので、これを足下に表現することは、仏が遊行説法、すなわち、自在の歩行をすることにより法輪を転ずることを意味している。これはとりもなおさず、足下に千輻

輪相をもつことにより、自由、自在に歩行説法する力をもつものである。

3) 第三の特徴は、足裏に柄がなく（図 4）、後ろの衣のすその部分に柄があり、足裏と蓮台とは直接固定されず、足裏と蓮台とは離れている。

柄（ゼイ）とは孔にさし入れる栓（ホゾ）のことである。

前出の大恩寺本像縁起（図 5）に「別のあやつりなふして蓮台にたたせたまう如法の尊容は…」とあるのがこのことで、これを指して「憂喜安志（浮足）の尊像と申し奉りぬ」といっている。

“このような仏像は、いつでも動き得る状態にあることを示し、また、口を開き歯をみせるという動きのある顔の表情、千輻輪相によりどこにでも歩いて行くことのできる阿弥陀の姿は、生きている仏の姿以外の何ものでもない”と加藤教授は



図 5 大恩寺歯吹如来像
(加藤による)



図 6 本覚寺本尊(加藤に
よる)



図 7 栄国寺歯吹如来像(加藤
による)

述べている。

そして、これらの尊像の表現は三十二相（応神仏の具えた三十二種のすぐれた相好）をできうるかぎり表現しようと努めた像である。

京都本覚寺の歯吹如来像（図6）には本尊如法仏縁起という卷子本二巻の中に本尊の製作過程がこまかく述べられているという（加藤教授による）。

これによると「所及心励懇力奉願三十二相者」（心におよぶところ、懇力に励め、三十二相を願し奉る）とあり、歯相については「四十歯齊逾雪相。四十ノ御歯ハ水精ヲ以テ植ル也」、また「四牙鮮白鋒利相。同ジク水精ヲ以テスル」とある。また、さらに、「千輻輪文円満相、御足下ニ輪文等在之」と書いてあるという。

このような点から、歯吹如来の歯相の表現は、生身仏を現わすとともに三十二相の一つの表現であって、中山太郎氏の言われるように、わざわざ報賽を得んがために造られたものでないことがわかっていただけたと思う。

早稲田大学加藤諄教授は、以上のように、歯吹如来像は仏像そのものが生きた姿と体を現わした生身仏であると説明されている。

そして、生身仏を現わしている例として、名古

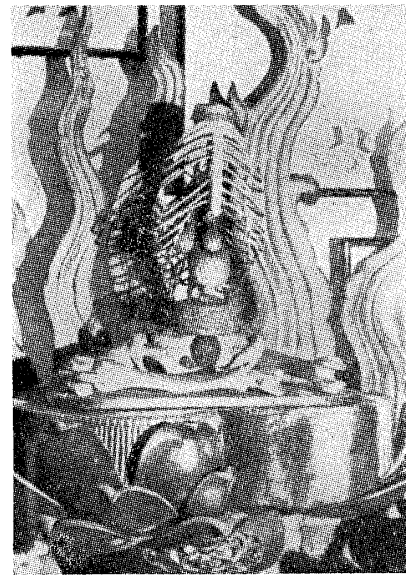


図 8 栄国寺本尊胎内(加藤による)

屋市中区東橋町にある栄国寺本尊の歯吹如来像について詳細に説明されている。

この本尊は写真（図7）のように来迎印をとる半跏像である。

加藤教授は「江戸時代の製作になるものであるが、歯相はかなり誇張された表現となり、足裏の仏足文様も末葉的であって、千輻輪文に流水文を伴って表わされている」と他の歯吹如来像との違いを述べられている。

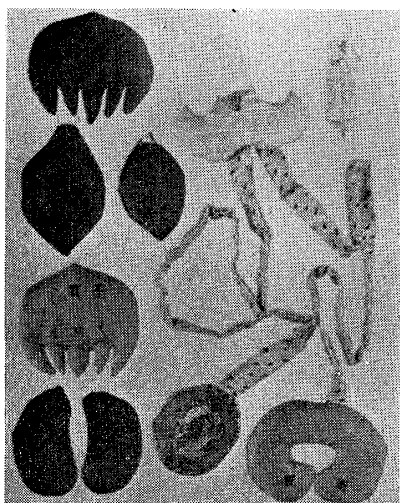


図 9 清凉寺本尊胎内に発見された絹製五臓の模型
(アルファより転載)

この像は、蓮台上に坐っている半跏の姿態を、そのまま上に持ち上げると写真のように半跏像の内は空洞で、蓮台上に五臓六腑、骨格が残されている(図8)。

加藤教授は「その生々しい写真的な色彩は、あたかも人体標本の見世物の如き感を与える」と驚歎されている。そして、さらに「このように、仰ぎ向えば笑める唇を開いてものを言い、足裏に転法輪相を示して行住説法の心を表わす。そういう生ける仏の姿であるのに加えて、いかに時代(江戸)の相とはいえ、仏をあたかも生ける人間さながらの肉体の如く、胎内に内臓、骨格をつくり現わすとは、これまさに生身像としての意図があったことを最早否定し難いものと思う」と齒吹如来像が生身仏として作られていることを確認されている。

さて、京都四条河原町から京福電鉄嵐山線に乗って、嵐山まで行くと、南は有名な嵐山公園である。桂川にかかる渡月橋の附近の景色は四季それぞれの風情があってよいところである。嵐山駅より北にのぼって国鉄山陰線の踏切を渡り、真直に行くと、つき当たりが嵯峨。清凉寺である。通称釈迦堂と呼ばれている。

ここの本尊は釈迦牟尼の壮年の面影をいまに伝える釈迦像で、宋で模刻し、僧^{ちやうねん}奄然が日本にもたらした生身の像といわれたものである。

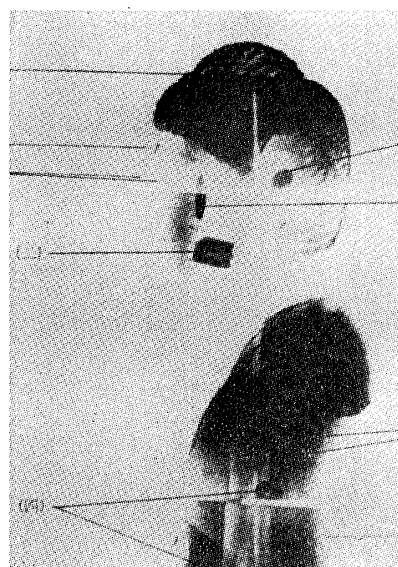


図 10 清凉寺本尊X線写真(加藤による)(二)箱型の透影像



図 11 清凉寺本尊X線写真(頭頂部)(加藤による)

昭和29年、噂さに違ず、この釈迦像の胎内より多くの納入品とともに絹布製彩色の五臓六腑の模型(図9)が出てきた。

この年、わたくしは京都で開かれた日本医学会総会に出席していたので、早速、京都博物館に陳列されていた五臓の模型を見に行き、その足で清凉寺の釈迦像を拝観したことを憶えている。

このように、模型とはいえ五臓六腑が蔵せられることは生身仏であることを示している。

この清涼寺釈迦像の胎内文書の中に「^{ようき}雍熙二年(985)八月初七日造像之次，入仏牙於像面」とあり，願文，經典，版画とともに八月十八日台州で封蔵したと書かれている。

注目すべきことは，仏牙を像面に入れたということである。

仏牙とは釈迦の犬歯をいう。

釈迦入滅の後に仏身を荼毗に附した際，全身が悉く細粒の舍利となったが，仏の歯牙（四大牙，四本の犬歯）のみは原型のまま灰燼中に存在していたと後分涅槃經，華嚴經疏等につづいている。これを「仏牙舍利」あるいは，通称「仏牙」という。

如来は左右上下に総計四大牙を有し，それはいずれも円形，快利，白浄，平正，漸細である。

理趣六度經には「如来口中四牙，所有飲食及毒藥，至此牙時變成甘露」（如来口中四牙，飲食および毒藥あるところ，この牙に至るとき，変じて甘露となる）と説いている。

仏牙を像面に入れることは，この釈迦像に歯相のあることを意味するものである。

しかし，清涼寺釈迦像の顔をみても口唇は固く閉じており，歯吹如来像のような歯相の表現は全くない。

ところが，この像の左側面から撮影したX線写真（図10）をみると，いわゆる頬にあたる部分に箱型の影がある。これを頭頂部より写すと，図11のように歯牙が納入されているのがみられる。

この生身仏といわれた釈迦像と歯吹如来像の造

像機縁との関係について，加藤教授はつぎのように考察している。

「清涼寺釈迦像において生身具現の相として仏牙（著者追加：絹布五臓模型など）を入れた動機と，歯吹如来像において三十二相の中の歯相が生身具現のために使用された動機とは一脈通ずるものがあると考えられる」と述べている。

以上，早大加藤諄教授の研究「歯吹如来像の表現とその意義」を参考に歯吹如来歯相表現の疑問を解いてきた。

歯吹如来が，仏像における生身思想を表わそうとして造られたものであって，歯痛や歯の病める人々を集めて報賽を得んがため，儲けるためにわざわざ造られたものでないことが理解いただけたものと思う。

この報告を終るに当り，資料の提供並びにご指導を賜った早大加藤諄教授，金沢邦夫氏に深謝いたします。また学会の前日急逝された恩師故関根永滋学長に本報告を捧げご冥福を祈ります。合掌

参考文献

- 1) 加藤 諄：歯吹如来像の表現とその意義，美術史研究第10冊抜刷昭和48年3月20日発行
- 2) 中山太郎：「歯牙と民俗」歯長寺の由来と 歯吹如来「よはい草」ライオン歯磨編。第5輯9～10頁
- 3) 「よはい草」ライオン歯磨編第4輯
極楽寺の歯吹佛 16頁
誓願寺の歯吹如来 17頁
称念時の歯吹如来 18頁